

# 日本語地図課題対話における参照対象の導入形式 On the form of referential expression in Japanese Maptask dialogue corpus

川端 良子<sup>†</sup>

Yoshiko Kawabata

<sup>†</sup> 国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

ykawabat@gmail.com

## 概要

『日本語地図課題対話コーパス』において、地図上のランドマークが最初に対話に導入される方法を分類する。分類方法を提案し、提案した方法に則って実際のデータにアノテーションを施し、提案方法の有効性について検討する。

キーワード：references, mutual knowledge

## 1. はじめに

特定の対象について会話が行なわれているとき、話し手が発話によって指示した対象と同一の対象を聞き手が想定していることがコミュニケーション成立のためには不可欠である。そのため、話し手は、聞き手が特定の対象を想定できるように発話を計画する必要がある。その際、話し手と聞き手との間で、対象の参照形式についての共有信念があれば、その表現を用いることができるが、そうした共有信念が常にあるとは限らない。特に難しいのは、聞き手の参照対象についての知識の有無が不確かな場合である。聞き手が参照対象を知らないことが確実な場合は、相手が対象を知らないものとして対象を会話に導入する計画を立てればよいからである。

参照対象に関する聞き手の知識が不確かな場合に、話し手が対象を会話に導入する方法については、英語では [1], [2] などの研究がある。日本語でも英語話者と同様の方法が用いられることが報告されている [3]。しかし、実際にどのような形式がどの程度使用されているのかということについて、まだ十分な調査は行なわれていない。そこで本研究は『日本語地図課題対話コーパス』を題材に、対象が最初に会話に導入される際の形式について定量的な調査結果を示す。英語版地図課題対話コーパス [4] を用いた同類の分析は、[5] によって行なわれているが、導入の形式についての詳しい分類は行なわれていない。本稿では、実際のデータに基づいた分類を提案し、提案した方法の有効性に

ついて検討する。

## 2. 日本語地図課題コーパス

『日本語地図課題対話コーパス』は、2名が地図課題と呼ばれる課題に参加し、一方が持つ地図に描かれた経路をもう一方の参加者に音声言語により伝達し、経路を再現するという共同的活動中に行われた言語活動が収録されている。経路が描かれた地図をもった参加者は Giver、経路が描かれていない地図を持ち、経路を描写する参加者は Follower と呼ばれる。地図の経路は、複数のランドマークの間を通して描かれているため、対話参加者は経路を説明するために複数回ランドマークを参照する。ランドマークは、Giver の地図と Follower の地図の両方に存在する場合もあれば、片方の地図にのみ存在する場合がある。出発地点は両者の地図にあり、目標地点は Giver の地図のみにあるが、そのことは両者に明示的には知らされていない。そのため、参加者は、特定の対象を最初に参照する際、相手はその対象を知っているかどうか不確定な状況になっている。両者はそれぞれ別の部屋で、お互いの作業の様子が見えない状態で課題を遂行する。参加者は4人で一組になり、対話相手と役割を交換しながら、一人4回 (Giver2回, Follower2回) 課題を行う。このような4人組が16組あり、地図課題全体では128対話が収録されている。

## 3. アノテーション

ランドマークが会話に最初に導入される際の言語使用を分類する。単位として、「発話単位」[6]を用いた。発話単位とは、話し手と聞き手が行為や情報を交換する際の基本単位として提案されたもので、統語的、談話的、相互行為的な一まとまりに対応する単位とされる。手順としては、まずランドマークへの参照を含む発話を発話単位に区切り、次に以下のタイプの判定を行った。

**存在確認** 特定のランドマークの有無について聞き手に情報を要求する発話を「存在確認」とする。図1は、GiverがFollowerに「石の砂漠」の有無について確認要求を行っている。この発話では「出発地点」と「石の砂漠」の二つのランドマークを参照しているが、存在の有無について情報を要求しているのは「石の砂漠」についてのみである。そのため、「石の砂漠」について「存在確認」という注釈をつけ、「出発地点」については後述の「存在前提」という注釈をつける。このように、ランドマーク一つずつにそのランドマークの提示方法を判定する。

- 
- 1 G と出発地点の下に石の砂漠ありますよね。  
2 F はい。あります。
- 

図1 存在確認の例

**存在提示** 自分または相手の地図に特定のランドマークがあること、もしくはそのランドマークの特徴を相手に伝える発話を「存在提示」とした。図2の1行目でFollowerは「ゴルフ場」が自分の地図上にあることをGiverに伝えている。このような発話が典型的なものとなる。また、図3の2行目のような質問に対する答えも本分類とした。

- 
- 1 F えとここにゴルフ場てのがあんですよ。  
2 G はい。  
3 F そちらに無いようです。
- 

図2 存在提示の例

- 
- 1 G えと魔術山の上に何かありますか。  
2 F えと上に丸い山 丸い岩。
- 

図3 存在提示の例(質問に対する答え)

**非明示** 上記の「存在確認」と「存在提示」を区別する重要な要素は文末の表現である。文末に終助詞「か」「ね」などを共なう、もしくは上昇調で発話している場合は相手から情報を要求していると捉えられる。一方、動詞や助動詞の終止形が用いられているような場合には聞き手に情報を伝えようとしていると捉えられる。しかし、図3のように、質問の答えでないにもかかわらず、こうした文末の要素がなく、「存在確認」か「存在提示」か判断できない場合があった。これを「非明示」とした(図4)。

- 
- 1 F あ。洞窟。  
1 G えとひえと 洞窟はここに無いんですけど。
- 

図4 非明示の例

**存在前提** 以上に述べた3つのタイプはいずれもランドマークの存在や位置などが発話の中心的内容とされていたが、ランドマークが存在していることを前提にして、存在確認や存在提示以外の発話行為を行う場合も少なくなかった。これを「存在前提」という分類にした。図1の「出発地点」、図5の「牧場」のようにランドマークが修飾部に使用される場合がその典型的な例である。

- 
- 1 G で今度牧場の上を通る。  
2 F その牧場でゆうのは無いから。  
3 G 無い。  
4 F 無い。
- 

図5 存在前提の例

**その他** 上記に該当しない発話

会話に最初に導入されたランドマークとは、ランドマークを含む発話単位の開始時点が一番早いものとした。ただし、その発話が聞き手に聞こえなかったと判断できる場合や、話し手が発話を言いかけて途中でやめた場合は、次にランドマークの参照を含む発話を分析対象にした。

#### 4. 結果

地図課題対話全128中の64対話においてランドマークが最初に会話に導入されたときの形式の頻度とその比率を表1、表2、表3に示す<sup>1</sup>。

表1 「出発地点」導入形式の使用頻度と比率

	頻度	比率(%)
存在確認	29	46.0
存在提示	11	17.5
非明示	4	6.3
存在前提	16	25.4
その他	3	4.8
合計	63	100

表1は、「出発地点」が会話に導入される方法、表2の「ランドマーク一般」とは、「出発地点」と「目標

<sup>1</sup>本アノテーションは著者1名で行い、分類で迷う場合も少なくなかった。そのため結果の数値については参考程度に留められたい。

地点」以外のランドマークが会話に導入される方法、表3は、「目標地点」が会話に導入される方法を示している。出発地点と目標地点を他のランドマークと分けて集計するのは、課題の特徴から両者が他のランドマークとは異なる特徴を持っているため、それが会話への導入方法にも違いを生じさせる可能性があるためである。

表2 「ランドマーク一般」導入形式の使用頻度と比率

	頻度	比率 (%)
存在確認	486	60.3
存在提示	147	18.2
非明示	54	6.7
存在前提	113	14.0
その他	6	0.7
合計	806	100

表3 「目標地点」導入形式の使用頻度と比率

	頻度	比率 (%)
存在確認	13	21.7
存在提示	33	55.0
非明示	0	0
存在前提	8	13.3
その他	6	10.0
合計	60	100

「出発地点」と「ランドマーク一般」ではどちらも「存在確認」の使用が最も多かったが、「目標地点」では「存在提示」が多かった。「出発地点」と「ランドマーク一般」では2番目に多い方法が「出発地点」では「存在前提」であるのに対し、「ランドマーク一般」では「存在提示」が多かった。

## 5. 考察

結果で示された「出発地点」「ランドマーク一般」「目標地点」の会話への導入方法の使用傾向は、それぞれのランドマークに対する対話参加者の認識の違いを反映したものと考えられる。出発地点と目標地点は、すべての地図課題で存在し、しかも全て同じ条件(出発地点は互いの地図に存在、目標地点はGiverの地図のみ存在)で存在する。したがって、参加者は課題を繰替えし行うことで、出発地点は互いの地図にあること、目標地点はGiverにのみ存在するという予測が立つ。このことが、出発地点ではランドマーク一般と比べて「存在前提」の使用が多く、目標地点では「存在

確認」が減り「存在提示」が多くなる理由と考えられる。今回提案した分類は、対話参加者の参照対象に対する認識の違いと、会話への導入戦略の違いを分析するため方法としてある程度有効だといえる。

## 6. まとめと今後の課題

本稿は、参照対象の会話への導入方法をいくつかのタイプに分ける方法を提案した。そして、実際のデータで分類を行い、その有効性を検討した。今後は、親近性や課題の熟練度と参照対象の導入方法の関係や、参照対象の導入方法によってその後の会話の流れがどのように変化するかなどについて分析する予定である。

### 謝辞

本研究はJSPS科研費JP19K13196の助成を受けたものです。

## 文献

- [1] Sacks, Harey & Schegloff, Emanuel A. (1979) "Two preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction", In Psathas, George (Ed.), *Everyday language: Studies in ethnomethodology*, pp. 15-21.
- [2] Clark, Herbert H and Deanna, Wilkers-Gibbs, Deanna, (1986) "Referring as a collaborative process", *Cognition*, Vol. 22, pp. 1-39.
- [3] 串田秀也 (2008), "指示者が開始する認識探索-認識と進行性のやりくり-". *社会言語科学*, 第10巻, 第2号, pp.96-108.
- [4] Anderson, Anne H. and Bader, Miles and Bard, Ellen G. and Boyle, Elizabeth and Doherty, Gwyneth and Garrod, Simon and Isard, Stephen and Kowtko, Jacqueline and Mcallister, Jan and Miller, Jim and Sotillo, Catherine and Thompson, Henry and Weinert, Regina,(1991), "The HCRC Map Task Corpus", *Human Communication Research*.
- [5] Anderson, Anne H and Boyle, Elizabeth A, (1994) "Forms of introduction in dialogues: Their discourse contexts and communicative consequences", *Language and Cognitive Processes*, Vol. 9, No. 1, Taylor & Francis, pp. 101-122.
- [6] JDRI (2017),"『発話単位ラベリングマニュアル』 version 2.1", <http://www.jdri.org/open-data/> から入手可能